

信濃毎日新聞に「あずさ病児保育室ハイジ」が掲載されました。(H23年11月17日付)

病気の子ども 保護者に代わって世話



病気で保育園などに登園できない子を預かる「病児対応型」の施設「あずさ病児保育室ハイジ」(松本市)を訪ね、相次病院に併設して病児対応型施設が広がっている。この日預けられていたのは、1歳の女の子、4歳と5歳の女の子の計3人。風邪が対象。同市に住み、市内の自宅で保育園を休んだが、保育園や幼稚園に通っていても症状は軽いため、午後には無料で利用できる。昼寝の後、部屋で静かに遊んで過ごす。保育士の女性「これで遊ぶ」と人形を見せて、女の子がうれしそうに表情を見せた。

同保育室は、医療法人・梓誠会が経営する梓川診療所に市が運営を委託し、今年4月開設。利用人数によって保育人員1〜3人が対応する。看37人を既に上回った。

「病児保育」広がる

子どもが急に熱を出してしまったり、でも仕事は休めない。共働きの親や一人親がそんなとき頼れる制度として「病児保育」がある。県内でも、市町村によって取り組みに差

はあるが、病院などに委託して、病児や回復期の子どもを預かる病児保育施設が増えている。また、家庭に向いて面倒をみる派遣型のサービスも広がりつつある。

対応施設が増加 派遣型も 取り組みに地域差

病児保育施設 保育園などに登園できない、病児や病み上がりの子を預かる施設。病状によって「病児対応型」「病後児対応型」「体調不良児対応型」の三つに分類され、全国に計約1300カ所(2010年度)ある。利用する場合、症状が安定していることに加え、感染症かどうかなど、施設によって受け入れ条件が異なる。県内で、国・県の補助を受けて運営する病児保育施設があるのは、佐久、上田、東御、岡谷、諏訪、茅野、飯田、松本、塩尻、中野、長野の各市と原村(10年度未現在)。

「あずさ病児保育室 ハイジ」で、保育士とおやつを食べる子どもたち。隣接する梓川診療所の看護師も子どもたちの体調管理に気を配る＝11日、松本市

同市は、病児対応型の施設とは別に、回復期の子を預かる「病後児対応型」の施設も2カ所設置している。計4カ所の施設数は県内市町村で最も多い。病後児対応型の施設も昨年年度、延べ326人が利用。前年度より76人増えた。

諏訪市は昨年12月、市内の病院に委託して、病児、病後児両方に対応する施設を開設した。諏訪地方に住む生後6カ月から小学3年生までが対象で、諏訪市民は無料で利用できる。今年4月から10月までの利用者は延べ186人。市でも課は「多岐な」という印象。市民に浸透してきたと思う。

県内でも、家庭課題による病児保育施設は、昨年度末時点で県内12市町村に計16カ所。このほか、施設面の条件などから、補助を受けずに運営されている施設もある。ただ、市町村の取り組みには差があり、利用状況にもばらつきが見られる。

長野市の病児保育施設は、病後児対応型の1カ所だけ。料金は1日2000円。対象は生後6カ月から就学前までに限られる。利用は2008年度の延べ97人をピークに、09年度68人、10年度38人と減

少。市保育家庭支援課は「現場から需要が多くて困るといふ声は聞かない」とし、現状で対応できているとする。

施設で預かるのではなく、家に保育スタッフが出向く派遣型サービスも、市町村の社会福祉協議会やNPOなどが手がけている。スタッフの自宅に預かるサービスもある。長野市のNPO法人「アリスチヤイルドメイト」は安曇野市にも事務所を置き、新生児から小学生までを対象に、周辺地域にスタッフを派遣。24時間利用可能で、急な発病や高熱、感染症でも対応する。代表の福原裕美さん(59)は「長野市には病児対応の施設がないので、私たちを頼ってくる人がいる」と話す。

子ども文化ステーションは、生後3カ月から小学6年生までの病児・病後児を対象に派遣。利用者は月平均延べ2人。施設ではなくこちらを遊ぶ保護者もいるという。松本市ファミリーサポートセンターは1時間700円。一対一でみてもらえる利点などから、施設ではなくこちらを選ぶ保護者もいるという。4月から10月までに延べ55人が利用した。担当者は「世話をする人との信頼関係や、家庭的な雰囲気を好む保護者に受け入れられている。施設も含め、使い勝手の良いサービスを選んでもらえれば」と話す。(葉山大則)

あした はぐくむ